清少納言『枕草子』の古注釈『春曙抄』

2007.07.10 更新

星の文学は『枕草子』から

清少納言は、星の和名「よばひ星」を『枕草子』二四三段の「星は」のなかで、

星はすばる、彦星、ゆふづゝ。よばひ星、少しをかし。尾だになからましかば、まいて。

と記述する。この星の和名「よばひ星」を掲載する資料として見逃せないのが半世紀早い源順『倭名類聚抄』〔天部第一・罄〕である。順は、

星　説文云星萬物精上所生也。桑經反［和名］保之。
明星　兼名苑云歳星［一名］明星此間云。阿加保之。
長庚　兼名苑云太白星［一名］長庚、暮見於西方爲長庚此間云。由不豆豆。
牽牛　爾雅註云牽牛［一名］何皷［和名］比古保之。又、以奴加比保之。
織女　兼名苑云織女、牽牛疋也［和名］太奈八太豆女。
流星　兼名苑云流星［一名］奔星［和名］與八比保之。
彗星　兼名苑云彗星、其形如箒篲也。音遂又音歳［和名］八々木保之。
昴星　宿耀經云昴星、六星火神也。音與卯同。［和名］須八流。
天河　兼名苑云［一名］天漢。今按又名河漢。銀河也。［和名］阿万乃加八。

と所載している。ここで、『枕草子』と共通する星の名前は、「【長庚】由不豆豆」「【牽牛】比古保之」「【流星】與八比保之」「【昴星】須八流」の四語で、この凡てを順『和名抄』に見ることができるのである。いわば、『和名抄』を参考にしているのであるまいか。この星の名づくしことばからが随筆文学のなかに組み込まれて展開していることは、美的妙趣として宮廷女房のサロンが見始めていることを示唆しているのである。この平安時代の随筆文学が出現したことで星は美的対象物となっていく。星を日月と同じように記録することは古代からあったに違いない。実際、『先代舊事本紀』巻三十三・天神本紀に、「築紫弦田物部等祖天津赤星」「爲祖天津赤星」とあり、『皇太神宮儀式帳』巻第一に「榛原神社、一處。稱天須婆留女命御玉。無形。奈良朝廷御代定祝」、神樂歌70〔大系本「古代歌謡集」340頁〕には「明星（あかぼし）」を本「吉々利々　千歳榮　白衆等　聽説晨朝　清淨偈　也　安加保之波　明星波　久波也　古々奈利也　名仁志加毛　古与比乃津支乃　多々古々仁万須也　多々古々仁　多々古々仁末須也」末「白衆等　聽説晨朝　清淨偈　也　あか保之波　明星波　久波也　古々な里也　なに志加毛　古与比乃月乃　多々古々耳万須也　たゝ古々仁　た々古々仁万須也」が描かれている。星の神話譚は山口博が「消された星の神話」〔日本風土記学会『紀事』17・一九九一年三月〕で説くように誅殺されているのである。しかし、記録類では、「箒星」「流星」「長星」はしっかり観察されている。このことは、中国東洋思想が反映され、北極星を中心として星の巡りを知ることで、地上における天帝の政事が掌られていくことに機縁している。占星術がもてはやされていく所以でもある。この星の巡りそのものが時の政事に色濃く反映されるが故に、国家機密の内包することもあって文学から遠のいていたというのである。

随筆『枕草子』の自然（天象語）

〔枕草子　十〕　日は　入日、いりはてぬる山際に、光りの猶とまりてあかう見ゆるに、うすきばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり、

〔枕草子　七〕　人のなぞ〳〵あはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵しかりけるが、左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へなどたのむるに、〈〇中略〉其日になりて、〈〇中略〉天にはりゆみといひ出たり、〈〇中略〉右の人をこに思ひて、うちわらひて、やゝさらにらずと口引たれて、さるがふしかくるに、數させ〳〵とてさゝせつ、〈〇下略〉

〔枕草子　十二〕　ある所に中の君とかやいひける人のもとに、君達にはあらねども、其心いたくすきたるものにいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみじうてりておもしろきに、名殘おもひ出られんと、ことのはをつくしていへるに、今はいぬらんと遠く見おくるほどに、えもいはずえんなるほど也、出るやうに見せてたちかへり、たてじとみあいたる陰のかたにそひ立て、猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに、有明の月のありつゝもと、うちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月のひかり、もよほされて、おどろかさるゝ心ちしければ、やをらたちいでにけりとこそかたりしか、

〔枕草子　二〕　すぎにしかたこひしきもの　月のあかき夜

〔枕草子　六〕　あはれなる物　二十六七日ばかりのあかつきに、物がたりしてゐあかして見れば、あるかなきかに心ぼそげなる月の、山のはちかく見えたるこそいとあはれなれ、〈〇中略〉あれたる家にむぐらはひかゝり、よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき、

〔枕草子　十一〕　月のあかきにきたらん人はしも、十日、廿日、一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出たらんは、いみじうをかしとおぼえて、えあふまじうわりなき所、人めつゝむべきやうありとも、かならず立ながらも物いひてかへし、又とまるべからんをば、とゞめなどしつべし、月のあかきみるばかり、とほくもの思ひやられ、過にし事、うかりしも、うれしかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうにおぼゆるをりやはある、こまの、物がたりは、何ばかりをかしき事もなく詞もふるめき、見所おほからねど、月にむかしを思出て、むしばみたるかはほりとり出て、もと見しこまにといひてたてる、いとあはれ也、

〔枕草子　八〕　名おそろしきもの　ふさうぐも

〔枕草子　十〕　雲は　ろき、むらさき、くろき雲哀也、風ふく折の天雲、明はなるゝほどの黒き雲の、やうやうしろふなりゆくもいとをかし、朝にさる色とかや、ふみにもつくりけり、月のいとあかき面に、薄き雲いとあはれ也、

〔枕草子　十一〕　日はうらゝかなれど、そらはあさみどりにかすみわたるに、女房のさうぞくの匂ひあひて、いみじきおり物の色々のから衣などよりも、なまめかしうをかしき事かぎりなし、

〔枕草子　六〕　あはれなる物　秋ふかき庭のあさぢに、露のいろ〳〵玉のやうにてひかりたる、

〔枕草子　三〕　草の花は〈〇中略〉　りんだうは、枝ざしなどもむづかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出たる、いとをかし、

〔枕草子　七〕　つれ〳〵なるもの　雨うちふりたるは、ましてつれ〳〵なり、

〔枕草子　九〕　風は〈〇中略〉　八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風、いとあはれ也、雨のあしよこざまにさはがしう吹たるに、〈〇下略〉

〔枕草子　四〕　二月つごもりがた、雨いみじうふりてつれ〳〵なるに、御物いみにこもりて、さす

がにさう〳〵しくこそあれ、物やいひにやらましとなんの給ふと人々かたれど、よにあらじなどいらへてあるに、一日もにくらしてまゐりたれば、よるのおとゞに入せ給ひにけり、〈〇中略〉すびつのもとにゐたれば、又そこにあつまりゐて物などいふに、何がしさぶらふといとはなやかにいふ、あやしくいつのまになに事のあるぞととはすれば、殿守づかさなり、たゞこゝに人づてならで申べき事なんといへば、さし出てとふに、是頭中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりとくといふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんとおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえんとて、ふところにひきいれていりぬ、猶人の物いふきゝなどするに、すなはちたちかへりて、さらば其ありつる文を給はりてことなんおほせられつる、とく〳〵といふに、あやしくいせの物がたりなるやとて見れば、あをきうすやうにいときよげにかき給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり、らんじやうの花の時、きんちやうのもとゝかきて、末はいかに〳〵とあるを、いかゞはすべからん、御まへのおはしまさば御らんぜさすべきを、これがするゐりがほに、たど〳〵しきまんなに書たらんも見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞ其おくに、すびつのきえたる炭のあるして、草のいほりを誰かたづねんとかきつけてとらせつれど、返事もいはで、みなねて、つとめていととくつぼねにおりたれば、源中將のこゐして、草のいほりやある〳〵とをどろ〳〵しふとへば、などてかさ人げなきものはあらん、玉のうてなもとめ給はましかば、いできこえてましといふ、〈〇下略〉

〔枕草子　十一〕　雨は心もとなき物と思ひみたればにや、かた時ふるもいとにくゝぞある、やんごとなき事、おもしろかるべき事、たふとくめでたかるべき事も、雨だにふればいふかひなく口をしきに、何か其ぬれてかこちたらんがめでたからん、げにかたのゝ少將もどきたる、おちくぼの少將などはをかし、それもよべをとゝひの夜も有しかばこそをかしけれ、足あらひたるぞにくくきたなかりけん、さらでは何か、

〔枕草子　八〕　村上の御時、雪のいとたかう降たりけるを、やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして月いとあかきに、是に歌よめ、いかゞいふべきと、兵衞の藏人に給はせたりければ、雪月花の時とそうしたりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ、歌などよまんにはよのつね也、かうをりにあひたる事なん、いひがたきとこそおほせられけれ、

〔枕草子　五〕　めでたきもの　ひろき庭に雪のふりきたる

〔枕草子　六〕　あはれなる物　山里の雪

〔枕草子　八〕　雪のいとたかくはあらで、うすらかにふりたるなどはいとこそをかしけれ、又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれより、はしちかうおなじ心なる人二三人ばかり、火をけなかにすゑて、物がたりなどするほどに、くらうなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いとろう見えたるに、火ばししてはひなどかきすさびて、あはれなるもをかしきもいひあはする

　こそをかしけれ、よひも過ぬらんと思ふほどに、くつのおとちかうきこゆれば、あやしと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり、けふの雪をいかにと思ひきこえながら、なんでふことにさはり、其所にくらしつるよしなどいふ、けふこん人をなどやうのすぢをぞいふらんかし、ひるよりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひわらひ、わらうださし出たれど、かたつかたのあしはもながらあるに、かねのおとのきこゆるまでになりぬれど、うちにもとにもいふ事どもはあかずぞおぼゆる、あけぐれのほどにかへるとて、雪何の山にみてるとうちずんじたるは、いとをかしき物也、女のかぎりしてはさもえゐあかさざらましを、只なるよりは、いとをかしうすぎたるありさまなどをいひ合せたる、

〔枕草子　十〕　ふるものは　雪はひはだぶきいとめでたし、すこしきえがたになりたるほど、又い

とおほうはふらぬが、かはらのめごとに入て、くろうましろに見えたるいとをかし、

〔枕草子　十一〕　雪いとたかく降たるを、例ならず御格子まいらせて、すびつに火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、少納言よ、香爐峯の雪はいかならんと、仰られければ、みかうしあげさせて、みす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ、人々も皆さる事はり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、猶此宮の人には、さるべきなめりといふ、

〔枕草子　四〕　はすの十よ日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房どもなどして、もの丶ふたにいれつ丶いとおほく置くを、おなじくは庭に、まことの山をつくらせ侍らんとて、さぶらひめして、おほせ事にてといへば、あつまりてつくるに、殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなどもみなよりて、いとたかくつくりなす、宮づかさなどまいりあつまりて、ことくはへことにつくれば、所のう三四人まいりたる、殿守づかさの人も二十人ばかりになりにけり、里なるさぶらひめしにつかはしなどす、けふ此山つくる人には、ろく給はすべし、雪山にまいらざらん人には、おなじからずとゞめんなどいへば、聞付たるは、まどひまいるもあり、里とをきはえつげやらず、つくりはてつれば、みやづかさめして、きぬ二ゆひとらせて、えんになげ出るを、一づ丶とりによりて、をがみつ丶こしにさしてみなまかでぬ、うへのきぬなどきたるは、かたえさらでかり衣にてぞある、これいつまでありなんと、人々のたまはするに、十餘日はありなん、たゞ此ごろのほどを、ある限申せば、いかにととはせ給へば、む月の十五日までさぶらひなんと申を、御前〈〇藤原定子〉にもえさはあらじとおぼすめり、女房などはすべて年の内、つごもりまでもあらじとのみ申に、あまりとをくも申てけるかな、げにえしもさはあらざらん、ついたちなどぞ申べかりけると、下にはおもへど、さばれさまでなくと、いひそめてん事はとて、かたうあらがひつ、二十日のほどに雨などふれど、きゆべくもなし、たけぞすこしをとりもてゆく、ら山の觀音これきやさせ給ふなと、いのるも物ぐるをし、さてその山つくり

たる日、式部のぞうたゞたか、御使にてまいりたれば、とねさし出し、物などいふに、けふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき、御前のつぼにもつくらせ給へり、春宮弘徽殿にもつくらせ給へり、京極殿にもつくらせ給へりなどいへば、　こ丶にのみめづらしとみる雪の山ところ〳〵にふりにけるかな、とかたはらなる人していはすれば、たび〳〵かたぶきて、返しはえつかふまつりけがさじ、あざれたり、みすのまへにて人にをかたり侍らんとてたちにき、歌はいみじくこのむとき丶しに、あやし、御前にきこしめして、いみじくよくとぞおもひつらんとぞのたまはする、つごもりがたに、すこしちいさくなるやうなれど、なほいとたかくてあるに、ひるつかた縁に人々出ゐなどたるに、ひたちの介出きたり、〈〇中略〉にくみわらひて人のめも見いれねば、雪の山にのぼりか丶づらひありきていぬるのちに、右近の内侍にかくなんといひやりたれば、などか人そへてこ丶には給はせざりし、かれがはしたなくて、雪の山までか丶りつたひけんこそ、いとかなしけれとあるを又わらふ、ゆきやまは、つれなくてとしもかへりぬ、ついたちの日又雪おほくふりたるを、うれしくもふりつみたるかなとおもふに、これはあいなし、はじめのをばおきて、今のをばかきすてよと仰せらる、〈〇中略〉雪の山は、まことにこしのにやあらんと見えてきえげもなし、くろくなりて見るかひもなきさまぞたる、かちぬるこ丶ちして、いかで十五日まちつけさせんとねんずれど、七日をだにえすぐさじと猶いへば、いかでこれ見はてんと、みな人思ふ程に、俄に三日うちへいらせ給ふべし、いみじう口をしく、此山のはてをらずなりなん事と、まめやかにおもふほどに、人もげにゆかしかりつるものをなどいふ、御まへにもおほせらる、おなじくはいひあて丶御らんぜさせんと、おもへるかひなければ、御物のぐはこび、いみじうさはがしきにあはせて、こもりといふもの丶、ついぢのほどにひさしさしてゐたるを、えんのもとちかくよびよせて、此雪の山いみじくまもりて、わらはべなどに、ふみちらさせこぼたせで、十五日までさぶらはせ、よく〳〵まもりて、其日にあたらば、めでたきろく給はせんとす、わたくしに

もいみじきよろこびいはんなどかたらひて、つねにだいばん所の人、げすなどにこひて、くるゝくだ物やなにやと、いとおほくとらせたれば、うちゑみて、いとやすきこと、たしかにまもり侍らん、わらはべなどぞ登り侍らんといへば、それをせいしてきかざらんものは、ことのよしを申せなどいひきかせて、いらせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出ぬ、其ほどもこれがうしろめたきまゝに、おほやけびと、すまし、おさめなどして、たえずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、をがみつる事など、かへりてはわらひあへり、里にてもあくるすなはちこれを大事にして見せにやる、十日のほどには、五六尺ばかりありといへば、うれしくおもふに、十三日の夜、雨いみじくふれば、これにぞきえぬらんと、いみじうくちをし、今一日もまちつけでと、よるもおきゐてなげけば、きく人も物ぐるをしとわらふ、人のおきてゆくに、やがておきゐて、げすおこさするに、さらにおきねば、にくみはらだゝれて、おきいでたるをやりて見すれば、わらうだばかりになりて侍る、こもりいとかしこう、わらはべもよせでまもりて、あすあさてまでもさぶらひぬべし、ろく給はらんと申といへば、いみじくうれしく、いつしかあすにならば、いととう歌よみて、物に入てまいらせんと思ふも、いと心もとなうわびう、まだくらきに、おほきなるおりびつなどもたせて、是にろからん所ひたものいれてもてこ、きたなげならんはかきすてゝなど、いひくゝめてやりたれば、いととくもたせてやりつる物ひきさげて、はやうせ侍りにけりといふに、いとあさまし、をかしうよみ出て、人にも語りつたへさせんと、うめきずんじつる歌も、いとあさましくかひなく、いかにしつるならん、きのふさばかりありけん物を、よのほどにきえぬらん事と、いひくんずれば、こもりが申つるは、きのふいとくらうなるまで侍き、ろくを給はらんと思ひつる物を、たまはらずなりぬる事と、手を打て申侍つると、いひさはぐに、内よりおほせ事ありて、扨雪はけふまで有つやと、のたまはせたれば、いとねたく口をしけれど、年のうちついたちまでだにあらじと、人々啓し給ひし、きのふの夕ぐれまで侍しを、

いとかしこしとなんおもひ給ふる、けふまではあまりの事になん、夜のほどに、人のにくがりてとりすて侍にやとなんをしはかり侍ると、啓せさせ給へときこえさせつ、さて二十日にまいりたるにも、まづ此事を御前にてもいふ、皆きえっとて、ふたのかぎりひきさげてもてきたりつる、ぼうしのやうにて、すなはちまうできたりつるが、あさましかりし事、ものゝふたにこ山うつくしうつくりて、白き紙にうたいみじくかきて、まいらせんとせし事などけいすれば、いみじくわらはせ給ふ、おまへなる人々もわらふに、かう心にいれておもひける事をたがへたればつみうらん、まことには四日の夕さり、さぶらひどもやりて、とりすてさせしぞ、かへり事にいひあてたりしこそをかしかりしか、そのおきないできて、いみじう手をすりていひけれど、おほせ事ぞ、かのよりきたらん人にかうきかすな、さらば屋うちこぼたせんといひて、左近のつかさ南のついぢのとにみなとりすてし、いとたかくておほくなんありつといふなりしかば、げに二十日までもまちつけて、ようせずばことしの初雪にもふりそひなまし、うへ〈〇一條〉にもきこしめして、いとおもひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにもおほせられけり、さてもかの歌をかたれ、いまはかくいひあらはしつれば、おなじごとかちたり、かたれなど、御まへにものたまはせ、人々ものたまへど、なにせんにか、さばかりの事をうけ給はりながら、けいし侍らんなど、まめやかにうく、心うがれは、うへもわたらせたまひて、まことに年ごろは、おほくの人なめりと見つるを、これにぞあやしくおもひしなど、おほせらるゝに、いとゞつらくうちもなきぬべき心ちぞする、いであはれいみじき世の中ぞかし、のちにふりつみたりし雪を、うれしとおもひしを、それはあいなしとて、かき捨よなどおほせごと侍しかと申せば、げにかたせじとおぼしけるならんと、うへもわらはせおはします、

〔枕草子　十〕　ふるものは　みぞれはにくけれど、雪のましろにてまじりたるをかし、

〔枕草子　十〕　ふるものは　あられは板屋

〔枕草子　九〕　野分の又の日こそいみじう哀におぼゆれ、たてじとみすいがいなどのふしなみたるに、せんざいども心ぐるしげ也、おほきなる木どもたふれ、枝など吹をられたるだにをしきに、萩女郎花などのうへによろぼひはひふせる、いとおもはず也、かうしのつぼなどに、さときはをことさらにたらんやうに、こま〳〵と吹入たるこそ、あらかりつる風のわざともおぼえね、いとこききぬのうはぐもりたるに、くちばのおり物、うす物などのこうちききて、まことしくきよげなる人の、よるは風のさはぎに寝覺つれば、久しうねおきたるまゝに、鏡うち見て、もやよりすこしゐざり出たる、髪は風に吹まよはされてすこしうちふくだみたるが、かたにかゝりたるほど、まことにめでたし、物あはれなるけしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちいさふはあらねど、わざとおとなどは見えぬが、すゞしのひとへのいみじうほころびたる、花もかへりぬれなどしたる、うすいろのとのゐ物をきて、かみはをばなのやうなるそぎすゑも、たけばかりはきぬのすそにはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる、わらはべのわかき人のねごめに、吹をられたるせんざいなどを、とりあつめおこしたてなどするを、うらやましげにおしはかりて、つきそひたるうしろもをかし、

〔枕草子　八〕　名おそろしき物　はやち

〔枕草子　九〕　風は　あらし、こがらし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹たる花かぜ、いとあはれなり、八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風、いとあはれ也、雨のあしよこざまにさはがしう吹たるに、夏とをしたるわたぎぬの、あせの香などかはき、すゞしのひとへにひきかさねてきたるもをかし、此すゞしだに、いとあつかはうすてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんと思ふもをかし、あかつき、かうし、つま戸などおしあげたるに、嵐のさと吹わたりて、かほにみたるこそ、いみじうをかしけれ、九月つごもり、十月一日の程の空うちくもりたるに、風のいたう吹に、黄なる木の葉どものほろ〳〵とこぼれおつる、いとあはれ也、

〔枕草子　八〕　名おそろしき物　いかづちは名のみならずいみじうおそろし

〔枕草子　十〕　せめておそろしき物　よるなる神

《比較資料》『今昔物語集』の自然（天象語）

〔今昔物語　十二〕　山階寺燒更建立間語第廿一

今昔、大織冠子孫ノ爲ニ山階寺ヲ造リ給フ、〈〇中略〉而ル間三百餘歳ニ成テ、永承元年ト云フ年ノ十二月廿四日ノ夜始テ燒ヌ、〈〇中略〉二年ノ間ニ造畢テ堂舍皆成ヌレバ、同三年ト云フ年三月二日供養有リ、長者公卿已下ヲ引將テ下テ、法ノ如ク供養セラル、其ノ導師ハ三井寺ノ明尊大僧正也、請僧五百人、并ニ音樂ヲ調テ專ニ心ヲ至シ給フ事无レ限シ、而ルニ其ノ供養ノ日寅時ニ佛ヲ渡シ給フニ、雨氣有テ空陰テ暗クシテ星不レ見子バ、時ヲ知ル事不レ能ズ、陰陽師安倍ノ時親ト云フ者有レドモ、空陰テ星不レ見子バ、何ヲ注シニテカ時ヲ量ラム、可レ爲キ方无シト云フ程ニ、風モ不レ吹ヌ空ニ、御堂ノ上ニ當テ、雲方四五丈許ノ程晴レテ、七星明カニ見エ給フ、此レヲ以テ時ヲ見ルニ、寅二ツニ成ケリ、乍レ喜ラ佛渡リ給ヌ、空ハ星ヲ見セテ後、即チ本ノ如ク陰ヌ、〈〇下略〉

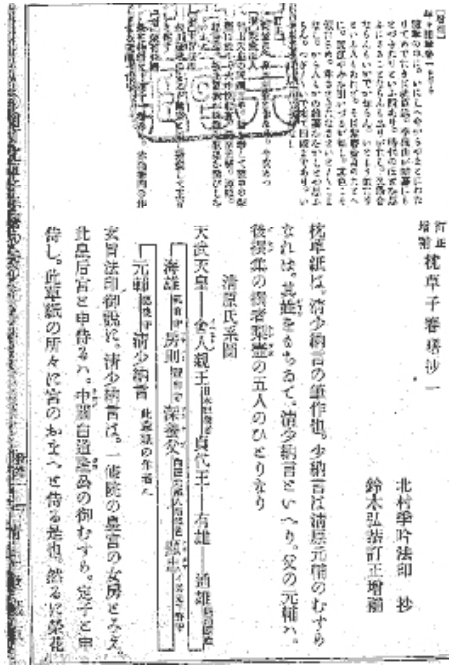
〔今昔物語　十九〕　比叡山大鐘爲レ風被二吹辷一語第卅八

今昔、比叡山ノ東塔ニ大鐘有ケリ、高サ八尺廻リ也、而ル間、永祚元年〈己丑〉八月ノ十三日、大風吹テ所所ノ堂舍寶塔門々戸々ヲ吹倒シケルニ、此ノ大鐘ヲ吹辷ハシテ、南ノ谷ニ吹落シテケリ、最初ノ房ノ棟板敷ヲ打切テ谷様ニ辷テ、次々ノ房共同ジク打拔ツヽ、七ツノ房ヲ打倒シテ、南ノ谷底ニ落入ニケリ、夜半計ノ事ナレバ、此ノ房共ニ人皆寢入タル程ナレドモ、其レニ人一人不レ損リケリ、其ノ比ノ希有ノ事ニナム云喤ケル、

《『枕草子』ホームページ資料》
九州大学所蔵十三行古活字版『枕双紙』（http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/makura/makura4/index.htm）
九州大学所蔵慶安二年版『清少納言枕草子』
枕草子語彙検索
『枕草子』章段対照表

随筆『枕草子』の古注釈書『春曙抄』『枕双紙抄』

北村季吟の古注釈『枕草子春曙抄』



訂正
増補 枕草子春曙抄一

北村季吟法印　抄
鈴木弘恭訂正増補

枕草紙は。清少納言の筆作也。少納言は清原元輔のむすめなれは。長能をはゝとして。清少納言といへり。父の元輔は。後撰集の編者梨壺の五人のひとりなり

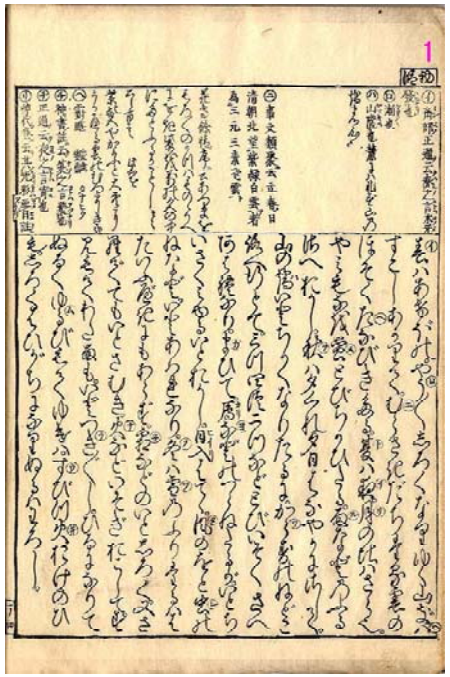
清原氏系図

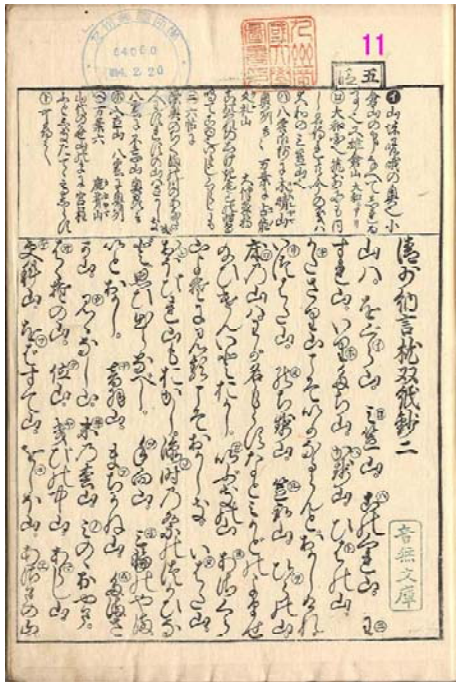
天武天皇――舎人親王――[illegible]――[illegible]――清雄――[illegible]――[illegible]――[illegible]

与謝野晶子
春曙抄に伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな　（『恋衣』明治38年）

『枕草子春曙抄杠園抄』〔日本図書センター〕

加藤盤齋『清少納言枕双紙抄』http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/makura2/index.htm





「香炉峰雪撥簾看」〔白氏文集〕

【新釈参考文献】

『葉月物語絵巻・枕草子絵詞・隆房卿艶詞絵巻』（日本絵巻大成10）　中央公論社刊
永井和子編　『枕草子』（新編日本古典文学全集）　小学館
川本皓嗣、小林康夫編　『文学の方法』　東京大学出版会
T・イーグルトン著　『文学とは何か』　岩波書店
U・エーコ著　『エーコの文学講義』　岩波書店
増田繁夫校注　『枕草子』　和泉古典叢書
田中重太郎他著『枕冊子全注釈』　角川書店
萩谷　朴著　『枕草子解環』　同朋舎
『枕草子大事典』　勉誠出版
『王朝語辞典』　東大出版会　国文学研究資料館ホームページ